



安倍圭子
マリンバコンサート直前!

スペシャル対談!!

九州を代表する マリンバ奏者

西南学院大学 音楽学者

田代佳代子 (たしろ かよこ)
福岡学院大学音楽学部マリンバ専攻卒業。同大学研究科修了。国際的マリンバ奏者・安倍圭子氏に師事。九州のマリンバ界に新風を吹き込み各メディアで取り上げられる。「九州マリンバ合奏団2005」主宰。田代佳代子オフィシャルサイト
<http://www.marimba-music.com>



栗原詩子 (くりはら うたこ)
東京芸術大学修士課程(音楽学)修了、芸術工学博士(九州大学)。新潮社「Gramophone Japan」第1回CD批評新人賞。フランス音楽史や映像学に関する論文・翻訳を手がけ、現在、西南学院大学国際文化学部准教授。
栗原詩子のサイト <http://sound.jp/musiclef/>

「黄金比率」の音響空間と評される、西南学院大学のチャペル。4月17日、この空間にて世界的マリンバ奏者安倍圭子さんを招いてのマリンバコンサートが開かれる。マリンバ奏者の田代佳代子さんと当日会場にもなる西南学院大学で教鞭をとる音楽学者の栗原詩子さんにマリンバや安倍芸術の魅力について語ってもらった。

**目で見る楽しさ
音で会話する楽しさ**
栗原 「自身の師匠と共演するにあたっては、また、特別な思い入れもありますよね？」

田代 「このタイプは安倍圭子とは対照的に、とても硬質な音色で旋律を作ります。そして3つ目は、複数の演奏者がマリンバの周りをぐるぐる回ったりしながらステージ空間を視覚的に彩るスタイル。このタイプは「目で見るおもしろさ」に満ちています。
栗原 「そうすると、安倍芸術というのは、ある意味、マリンバの響きそのものを、もっとも深く、弾きこんでいく世界になりますね。
田代 「ええ。派手な見せ場はどこにもありません。でも、マリンバという楽器の持つ「響きの可能性」を極限まで表現している安倍圭子の演奏を聴けるといことは、まるでベートーヴェン本人が弾くピアノを目の前で、生で聴くことができるのと同じ位貴重なことだと思っっているんです。
栗原 「なるほど、意味深い響きだと思えます。19世紀ごろ、大きなホールで演奏するのにふさわしいピアノという楽器は拡張されたわけですが、ベートーヴェンはちょうどその時期に、ピアノ独自の可能性を極限まで表現した作曲家でした。マリンバの場合も、安倍芸術がなければ、単に「木琴に共鳴パイプがぶらさがったもの」というイメージに留まっていたかも知れないわけですね。」

栗原 「自身の師匠と共演するにあたっては、また、特別な思い入れもありますよね？」

田代 「不思議なことに「師匠と演奏する」という意味での畏れは、ほとんど感じません。普通、演奏家は本番直前になると、多かれ少なかれ、周囲に「ビリビリとした空気」をまき散らしてしまうものですが、安倍圭子という音楽家は、むしろ「リラックスの空気」をまき散らすんです。そして、その空気が広がるよね、薄い半円球の傘のようなものが、ステージを包み込んでいます。それは、安倍圭子と共演した世界中の多くのプレイヤーが本場に体験してきたことです。その傘を、客席から感じる方もいらっしやるんですよ。
栗原 「そうですね。私自身も、安倍さんのステージを、音色のグラデーションで「舞台上に紗がかかる」というイメージで捉えていました。安倍芸術の場合、彩どりの豊かな音空間が、耳だけでなく目にも訴えかけてくるので、「見る喜び」があるんですね。
田代 「4月17日、西南学院大学での「安倍圭子チャペル・ナイト・ウィズ田代佳代子」では、音色と空間とのコラボレーションを、いっそう豊かに展開できると思います。熱心なクリスチャンである安倍圭子は、以前から、コンサートホールでなく教会で演奏してみましようかと誘ってくださっていたんです。
栗原 「演奏曲目も、安倍圭子作品が多いですね。安倍さんのソロ(独奏)では、響きの傘に注目したいと思います。安倍&田代のデュオ(二重奏)で演奏される「風紋」や「ランブーラン・パラフレーズ」の聞きどころはどのようでしょうか。
田代 「デュオの場合二人の奏者が、互いにマリンバの響きや思いつきを掛け合いながら、全体としての響きを作っていきます。私の弾くパートは記譜されているのですが、安倍圭子パートは本番でかなり即興性をおびるので、とてもエキサイティングなセッション体験になると思います。楽しみにしています。
栗原 「では、カルテット(四重奏)のための「森の会話V」は、どんな作品ですか。安倍&田代に加えて、田代さんの弟子にあたる田島由理さんとホフアーさんのカップルが、このステージのためにアメリカから来日されるそうですね。
田代 「「森の会話」シリーズは、安倍圭子のソロ作品「プリズム」を下敷きにしたセッションものです。「プリズム」で奏でられる様々な音の断片が、各プレイヤーに割りあてられていて、それをその場で即興的に絡み合わせるのです。マリンバを使って、音の会話をするのは、とても楽しいですよ。以前、安倍圭子と私の共演を聴いてくださったOLの方が、「ご自身のブログに書いていらしたことを、たまたま読むことができて、その時は、共感とうれしさで涙が出ました。その方は、囁くような音、泣くような音、泣くような音、笑うような音、叫ぶような音、怒るような音、恐怖するような音が聞こえた」と。
栗原 「安倍作品では、演奏者側の視点からポジティブに捉えられる即興の音楽が聴けそうですね。今度マリンバに馴染みがなかった方やお子さんも、チャペルの雰囲気を感じながら、やさしい音色に耳を傾けてみてください。」

田代 「不思議なことに「師匠と演奏する」という意味での畏れは、ほとんど感じません。普通、演奏家は本番直前になると、多かれ少なかれ、周囲に「ビリビリとした空気」をまき散らしてしまうものですが、安倍圭子という音楽家は、むしろ「リラックスの空気」をまき散らすんです。そして、その空気が広がるよね、薄い半円球の傘のようなものが、ステージを包み込んでいます。それは、安倍圭子と共演した世界中の多くのプレイヤーが本場に体験してきたことです。その傘を、客席から感じる方もいらっしやるんですよ。
栗原 「そうですね。私自身も、安倍さんのステージを、音色のグラデーションで「舞台上に紗がかかる」というイメージで捉えていました。安倍芸術の場合、彩どりの豊かな音空間が、耳だけでなく目にも訴えかけてくるので、「見る喜び」があるんですね。
田代 「4月17日、西南学院大学での「安倍圭子チャペル・ナイト・ウィズ田代佳代子」では、音色と空間とのコラボレーションを、いっそう豊かに展開できると思います。熱心なクリスチャンである安倍圭子は、以前から、コンサートホールでなく教会で演奏してみましようかと誘ってくださっていたんです。
栗原 「演奏曲目も、安倍圭子作品が多いですね。安倍さんのソロ(独奏)では、響きの傘に注目したいと思います。安倍&田代のデュオ(二重奏)で演奏される「風紋」や「ランブーラン・パラフレーズ」の聞きどころはどのようでしょうか。
田代 「デュオの場合二人の奏者が、互いにマリンバの響きや思いつきを掛け合いながら、全体としての響きを作っていきます。私の弾くパートは記譜されているのですが、安倍圭子パートは本番でかなり即興性をおびるので、とてもエキサイティングなセッション体験になると思います。楽しみにしています。
栗原 「では、カルテット(四重奏)のための「森の会話V」は、どんな作品ですか。安倍&田代に加えて、田代さんの弟子にあたる田島由理さんとホフアーさんのカップルが、このステージのためにアメリカから来日されるそうですね。
田代 「「森の会話」シリーズは、安倍圭子のソロ作品「プリズム」を下敷きにしたセッションものです。「プリズム」で奏でられる様々な音の断片が、各プレイヤーに割りあてられていて、それをその場で即興的に絡み合わせるのです。マリンバを使って、音の会話をするのは、とても楽しいですよ。以前、安倍圭子と私の共演を聴いてくださったOLの方が、「ご自身のブログに書いていらしたことを、たまたま読むことができて、その時は、共感とうれしさで涙が出ました。その方は、囁くような音、泣くような音、泣くような音、笑うような音、叫ぶような音、怒るような音、恐怖するような音が聞こえた」と。
栗原 「安倍作品では、演奏者側の視点からポジティブに捉えられる即興の音楽が聴けそうですね。今度マリンバに馴染みがなかった方やお子さんも、チャペルの雰囲気を感じながら、やさしい音色に耳を傾けてみてください。」

田代 「不思議なことに「師匠と演奏する」という意味での畏れは、ほとんど感じません。普通、演奏家は本番直前になると、多かれ少なかれ、周囲に「ビリビリとした空気」をまき散らしてしまうものですが、安倍圭子という音楽家は、むしろ「リラックスの空気」をまき散らすんです。そして、その空気が広がるよね、薄い半円球の傘のようなものが、ステージを包み込んでいます。それは、安倍圭子と共演した世界中の多くのプレイヤーが本場に体験してきたことです。その傘を、客席から感じる方もいらっしやるんですよ。
栗原 「そうですね。私自身も、安倍さんのステージを、音色のグラデーションで「舞台上に紗がかかる」というイメージで捉えていました。安倍芸術の場合、彩どりの豊かな音空間が、耳だけでなく目にも訴えかけてくるので、「見る喜び」があるんですね。
田代 「4月17日、西南学院大学での「安倍圭子チャペル・ナイト・ウィズ田代佳代子」では、音色と空間とのコラボレーションを、いっそう豊かに展開できると思います。熱心なクリスチャンである安倍圭子は、以前から、コンサートホールでなく教会で演奏してみましようかと誘ってくださっていたんです。
栗原 「演奏曲目も、安倍圭子作品が多いですね。安倍さんのソロ(独奏)では、響きの傘に注目したいと思います。安倍&田代のデュオ(二重奏)で演奏される「風紋」や「ランブーラン・パラフレーズ」の聞きどころはどのようでしょうか。
田代 「デュオの場合二人の奏者が、互いにマリンバの響きや思いつきを掛け合いながら、全体としての響きを作っていきます。私の弾くパートは記譜されているのですが、安倍圭子パートは本番でかなり即興性をおびるので、とてもエキサイティングなセッション体験になると思います。楽しみにしています。
栗原 「では、カルテット(四重奏)のための「森の会話V」は、どんな作品ですか。安倍&田代に加えて、田代さんの弟子にあたる田島由理さんとホフアーさんのカップルが、このステージのためにアメリカから来日されるそうですね。
田代 「「森の会話」シリーズは、安倍圭子のソロ作品「プリズム」を下敷きにしたセッションものです。「プリズム」で奏でられる様々な音の断片が、各プレイヤーに割りあてられていて、それをその場で即興的に絡み合わせるのです。マリンバを使って、音の会話をするのは、とても楽しいですよ。以前、安倍圭子と私の共演を聴いてくださったOLの方が、「ご自身のブログに書いていらしたことを、たまたま読むことができて、その時は、共感とうれしさで涙が出ました。その方は、囁くような音、泣くような音、泣くような音、笑うような音、叫ぶような音、怒るような音、恐怖するような音が聞こえた」と。
栗原 「安倍作品では、演奏者側の視点からポジティブに捉えられる即興の音楽が聴けそうですね。今度マリンバに馴染みがなかった方やお子さんも、チャペルの雰囲気を感じながら、やさしい音色に耳を傾けてみてください。」

安倍圭子のマリンバチャペルナイト with 田代佳代子

2010年4月17日(土) 18:00開演(17:30開場)
会場/西南学院大学チャペル 料金/一般 4,000円 小中高生 3,000円(全席自由) ※未就学児の入場はご遠慮ください
出演/安倍圭子・田代佳代子・Christopher Karl Hofer(クリストファー・カール・ホフアー)・ホフアー田島由理
【演奏曲目】古代からの手紙 小品メトラー(チューリップ・ポルカ、フィドル・パドル、他) 森の会話V
■主催/西南学院大学 ■共催/株式会社 アヴァンティ
■協賛/ヤマハ株式会社 ○(株)ヤマミュージック九州福岡店 後援/福岡県教育委員会 ○福岡市教育委員会 ○西日本新聞社 ○毎日新聞社 ○朝日新聞社
○読売新聞福岡本社 ○RKB毎日放送 ○FBS福岡放送 ○TVQ九州放送 ○テレビ西日本 ○FM FUKUOKA ○クロスエフエム
■チケット取扱い/ローソンチケット Lコード86330(0570-084-008・http://l-tike.com/) ○電子チケットぴあ Pコード341-845(0570-02-9999・http://t.pia.jp/) ○FFACアートエ ○ヤマミュージック九州福岡店(天神) ○クレモナ楽器 ○イズタバイオリン
■問合せ(株)アヴァンティ TEL.092-724-3226
(株)キャンパスサポート西南 TEL.092-823-3576 西南学院大学(栗原)TEL.080-3961-7654
※託児サービスあり(有料:2000円)要事前申込(080-3961-7654)

ホール・オブ・フェーム栄誉賞を
世界で初めて受賞したマリンバ演奏家
安倍圭子 (あべ けいこ)

国際的マリンバ演奏家。演奏活動の幅は広く、世界50カ国に及ぶ。また、世界90校以上の音楽大学で音楽指導を行い、50箇所以上の音楽祭に出演。マリンバの為にオリジナル曲を求めて、今までに自作品と委嘱初演した作品は270曲を超え、世界中のマリンバ奏者に演奏されている。文化庁芸術祭優秀賞を6回受賞。1993年国際打楽器芸術協会(本部:米国)よりホール・オブ・フェーム栄誉賞を世界最初のマリンバ演奏家として受賞。
安倍圭子オフィシャルサイト
<http://www.keiko-abe.com>

